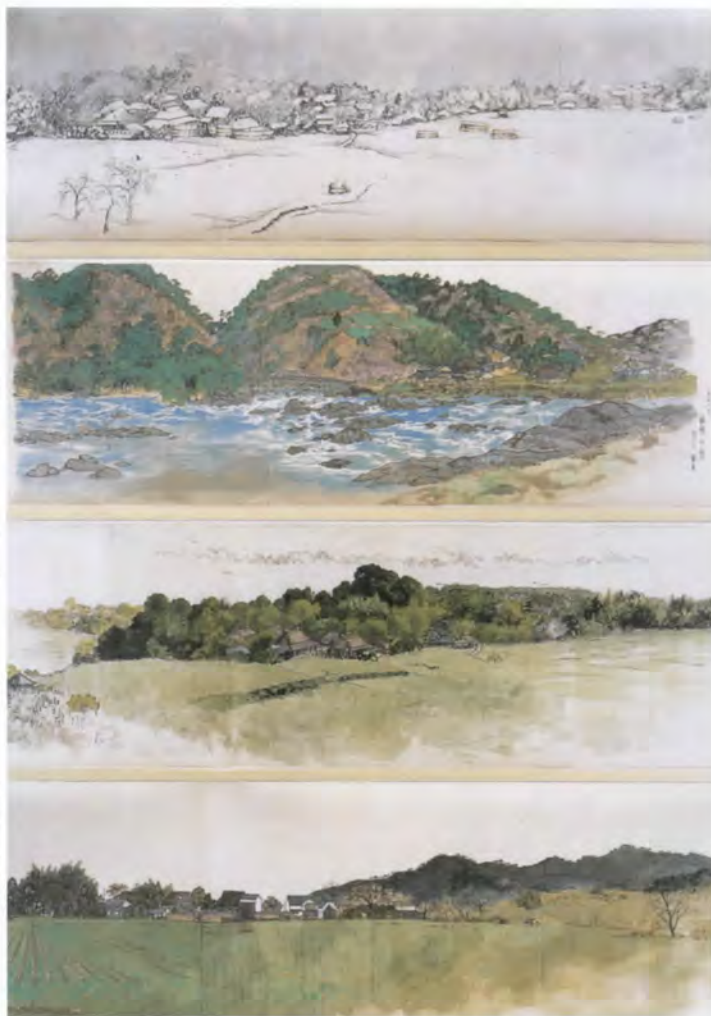


新収蔵品展

近世・近代絵画にみる琵琶湖と大津



雪に積む膳所

南郷の志々飛び

膳所

粟津別保附近

3月14日(日)～28日(日)

四季大津写生図巻

小林翠溪筆 紙本着色 五巻

三宅邦哉・香苗夫妻寄贈

雪に積む膳所・南郷の志々飛び・膳所・粟津別保附近・茶臼山より湖畔を望む 四〇・九×一五七・二(最大)

小林翠溪(一九〇二～五五)は、山元春華(円山派の系譜を引く近代京都画壇の大家、大津在住)の門人。舞鶴から膳所に出て、春華の主宰する画塾、早苗会に入門、若くして頭角を現しました。昭和三年(一九二八)には、師の推挙により久邇宮邸の天井画を描き、同六年には『滋賀懸人物名鑑』(滋賀日出新聞社)において、「春華門下の俊英 小林翠溪氏」の見出しをもって紹介されています。本作は、翠溪が十八・十九才の頃に描いたもの。未表装であったことから、絵画修練の一環として描かれた写生画と思われる。ただし、多くの画家がそうであるように、そこには、作家自身のみずみずしい感性が捉えた、単なる写実以上の風光のひとコマがあります。広々とした視界もまた素晴らしく、当時の写真記録からでは得がたい大津の景観を伝えています。とりわけ、南郷の鹿跳は現在、ダムにより水没しており、本作はまたとない記録でもあります。

世の中には、まだまだ興味深い作品や資料が隠れているものです。大津市歴史博物館の収集活動において巡り会った、ちよつと自慢の新収蔵品をお披露目いたします。今回は、近世・近代絵画が中心です。

第一部…湖と大津の風光

第二部…大津・近江ゆかりの画人

◆注目の展示作品◆

山王祭礼図 紙本着色 八曲一隻 個人蔵

江戸前期 八二・八×三五四・四

湖国屈指の大祭りである山王祭の中心行事のひとつ、拜殿出しと粟津の御供を描いたものです。四月十四日、天孫神社に移されていた大神が、日吉大社の西本宮に還御し、山王七社の神輿が次々と出御してゆく場面。

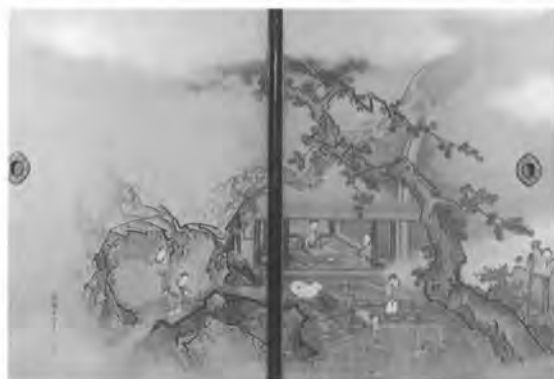
そして、下坂本の七本柳の浜から神輿を船に乗せて唐崎神社の沖合へ向かう船渡御の二場面が、生き活きた人物描写で彩られています。日吉大社内や唐崎などが、省略される一方、粟津神社へ向かう御供船（猿の幕が張られている）が膳所城とともに描かれるのは珍しいケースです。なお、膳所城の描写が、洛中洛外図の二条城と同図様となっており、本作品の出来映からも、熟練した一連の制作工房の仕事といえるでしょう。

蘭亭曲水図 石田友汀筆 紙本着色 襖四面 個人蔵

文化八年（一八〇九） 一六七・九×九二・二（各面）

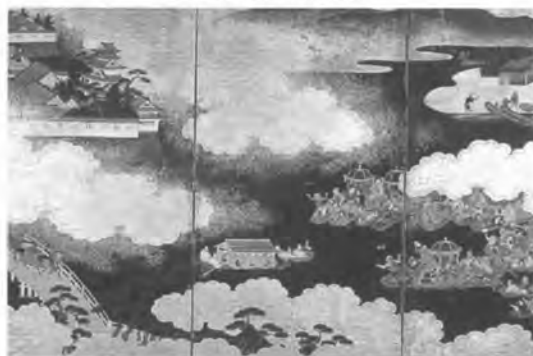
友汀は、応挙の師として知られる石田幽汀の息子。石田家は、鶴沢派（禁裏における絵画御用の頭取家。狩野派系）内の有力門人家です。当時の京都画壇では、

円山派を初めとした新興画派の台頭により狩野派系絵師は押され気味であったものの、彼は絵馬などに筆をふるって活躍を見せていました。本市京町の天孫神社にも、文化三年（一八〇六）に彼が描いた馬図絵馬が奉納されています。本作は、中国の書聖、王羲之（中央の人物）が序に詠んで著名な雅宴を描いたもの。手堅い人物描写とともに意欲に富んだ景観構成をみせており、狩野派流絵師としての優れた実力を示す力作といえます。



蘭亭曲水図（左2面）

山王祭礼図（部分）



山王祭礼図（全図）

果物図 川端玉章筆 絹本油彩・膠彩 一幅 個人蔵

明治一〇年(一八七七)か 三二・一×五五・七

川端玉章(一八四二〜一九一三)は、中島来章(大津出身ともいわれる円山派絵師、幕末京都画壇の重鎮)の弟子。維新前に上京。東京美術学校教授(円山派担当)として、幕末には衰退していた円山派の画技を、明治の画壇に受け継いだ画家です。その画技は高く評価され、明治二九年(一八九六)には帝室技芸員に任命されています。彼は自らの流派の祖である応挙を再評価・研究し、応挙のスタイルをとどめた作品を晩年まで孤軍奮闘のように残しました。また、学究肌の彼は、国学・漢学・画論等の学問も修める一方、高橋由一、ワグマンのもとで油彩の画法も学んでいます。本作は、その画業を物語る作例です。絹地の掛幅(掛軸)

にもかかわらず、そこに描かれる果物は、油彩の静物画さながらです。果実の表面に描写された光沢感などは、円山派の写生画法とは明らかに異なり、西洋の写実表現となっています。一方で、背景は日本画らしく余白として処理されており、和洋折衷のなんともいえない効果が出ています。同様の作品に「四時群花図」があり、これは、金地(絹地に金箔押し)に油彩と膠彩で描かれたものです。本作品は、金地ではないものの、やはり油彩膠彩併用の同技法で描かれたものと推測されます。なお、明治一〇年(一八七七)に玉章は、内国勸業博覧会に「四時群花図」(おそらく前作)、「果物・草花図」、「魚籠群花図」を出品し受賞されていますが、その内の「果物・草花図」に本作が該当する可能性も考えられます。



「図説大津市史」だより⑥

本欄では、本年十月に発刊予定の「図説大津市史」の編さん作業のなかで、市民の皆様からご提供いただいた貴重な資料を紹介しています。今回は、観音寺自治会蔵の「滋賀県令の布達」を紹介いたします。

明治八年(一八七五)三月、陸軍歩兵第九連隊が大津の別所村に移転してきました。軍用地は旧園城寺領の三万八〇〇坪。兵舎(現大津商業高校付近)や練兵場(現皇子山総合運動場付近)が設けられました。以後、別所村は長い軍事基地の歴史をもつことになるわけです。

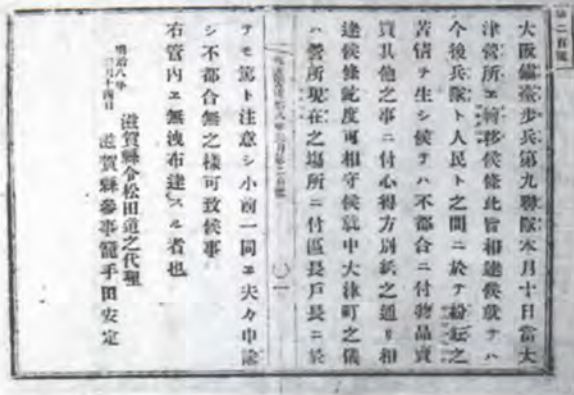
さて、九連隊の移駐からわずか数日後の、三月十四日、滋賀県令(当時の知事)松田道之の代理の県参事籠手田安定から、駐屯地のそばの観音寺町宛に、次のような通達が出されました。

それは、六カ条から成っていました。まず、売買は現金取引とし掛け売りは禁止(第一条)、これに異論を申し立てる兵卒があれば九連隊営所または県庁に申し出ること(第二条)、兵卒と

の金銭貸借も禁止(第三条)、兵卒からの官給品(武器・帽子・衣服・靴・毛布の類)を買い取らないこと(第

四条)、兵卒と娼妓との遊宴は禁止(第五条)、夜中等に休泊を乞う兵卒がある時はその免状を確認すること(第六条)、そしてこれらの事項については後日苦情を申し立てても受け付けないとするものでした。

九連隊の移駐にともない、滋賀県庁では、兵卒と周辺住民とのトラブル防止にまでも、細かな神経を使っていたことが、よくわかります。



学芸員のノートから⑬

「琵琶湖眺望真景図」(案内)

(新収藏品展出陳作品)

紙本墨画淡彩 広瀬柏園筆か 一卷 本館蔵

慶応二年(一八六六)頃か 三四・三×八五〇・一

全長八・五mにも及ぶ本図は、琵琶湖の南湖を一周しながら、その眺めをスケッチしたパノラマ写生図です。風景は、瀬田の唐橋を起点として出発し、遊覧船に乗船して眺めを楽しむかのように、逆時計回りに東から西へと南湖沿岸を巡り、尾花川のあたりで描き終わっています。天領の浜大津から膳所城にかけては禁に触れるためか、あえて描かれておらず、少々残念です。それでも、スケッチに描かれた風景は、荒い素描ではなく、記録的な姿勢で克明に写生されており、幕末における琵琶湖南湖およびその周辺の景観資料として、貴重な情報の数々を我々にもたらすものです。

今回は簡単な作品紹介として、大津市内のポイントを見てゆきます。まず目につくのは、瀬田の唐橋です。船の航行のため、橋桁の間隔が一部広くなっている構造(「廣ノ間」)であったことが本図からもよくわかります。琵琶湖大橋や近江大橋と同じですね。また、橋の欄干の擬宝珠が片側「十五」との細かいチェックも墨書されています。次に、ハゲ山で有名だった田上山に目を移すと、やはり斜面の描写が他の山と異なり、当時の禿げ地エリアも察しがつきます。ですが、湖南アルプスの異名を持つだけあり、その堂々たる山容は、

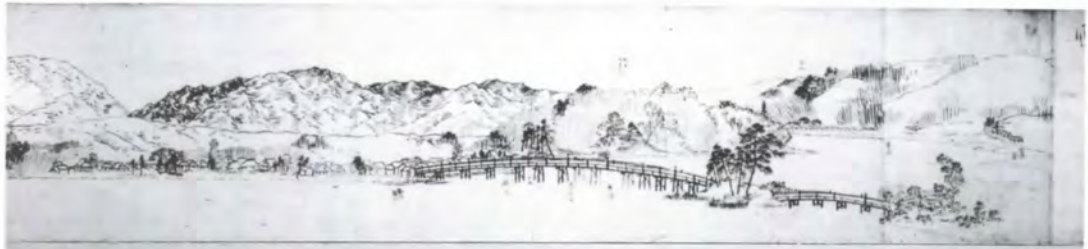
本図に描かれた山の中でも際立っています。さて、対岸に一つ飛びして湖西に移ると、柳ヶ崎には常夜燈がみえ、その右手には、唐崎の松がこんもりとした黒い傘として描かれています。誇張気味の描写でしょうが、広重もタローズアップした、亡き先代松の、それは見事な枝振り具合が忍ばれます。そして、比叡山の麓に注意すると、一面が棚田です。現在の滋賀里あたりでしょうか。石積みみの畦が層をなし、畦の所々には間隔を置いて木々が立ち並ぶ。よく手入れされた田園地帯の様子が遠目にも窺われます。そして、本図の南湖周航の締めくくりは、大きく描かれた千石岩と尾花川の家並みです。埋め立て以前の尾花川の集落には船着場や内部まで入る水路が窺われ、湖岸沿いの集落の様子がよくわかります。ちなみに、なぎさ公園から湖西を眺めると、ちょうど本図のような景観が広がります。

ところで、船もまた本図の主役です。その数も多く、手前に大きく描かれたものから沿岸に見える点景のものまで含めると、あわせて七九隻にのぼります。当時の湖上は、現代の道路事情さながらに、船の往来で賑わっていたことが窺われます。米俵・柴・炭等の物資を運んだり受け渡しをする船。漁労・藻刈りをする船。等々、琵琶湖独特の丸子船の船体については勿論、船上の積荷、作業の様子など、その活用の実態があらまに、かなり正確に捉えられている点は、これまで知られた関係絵画資料の質をはるかに凌ぐものです。本図を見て得られる情報はそればかりではありません。意外なことにも気づきます。幕末の大気の透明度がいかに高かったかということです。本館から伊吹山が見えるのは、一年を通して、非常に空気が澄んだ厳寒期の数日しかありません。しかも、そうハッキリと

見えるわけではありません。しかし、本図では、かなり濃いシルエットとして伊吹山が見えていることが確認できます。無論、鈴鹿の山並みも稜線の重なりが明確に描かれています。ちよつと驚くべきことは、富山の白山までが見えていることです。見えているのが本図に白山なのか、我々ではにわかには信じられないのですが、いずれにせよ、当時は現代よりはるかに空気が澄んでおり、幕末の人々が眺めていた琵琶湖の風景のスケールは、我々が日々眺めている風景より確実に広がったということですね。

なお、実は本図と酷似する作品が存在します。当時、大津に在住し、円満院門跡覚淳法親王に仕えた広瀬柏園(一八〇一〜七一、岸派の岸連山に師事したとも伝えられる)によって慶応二年に描かれたものです。その柏園画は、書き込みされたスケッチ段階の本図とは異なり、絹地に彩色された完成作品です。本図と柏園画は、その筆法が同様であり、構図もほぼ一致します。したがって、本図がその下絵である可能性は高く、そうであれば写生時期も柏園画の直前と考えられます。ただし両者間には異同もあります。本図に描かれた瀬田の唐橋と往来する多数の船は、柏園図では描かれておらず、生活場面のない純山水画的な風景となっています。依頼者の注文による変更でしょうか。この柏園画は、琵琶湖博物館の所蔵品です。

ちなみに、本図は、円山忠峯の古参門人の家に伝わったものです。恐らくは柏園の没後、下絵類が散逸し、その家に入ったものと思われます。巻頭裏には、「湖水之写 四条派」と墨書されており、その時点ですでに作者不詳となり、四条派絵師の仕事と推測されたようです。



瀬田唐橋



田上山



白山 (画面右)
比良山
唐崎 (画面中央左)



比叡山麓
尾花川
千石岩 (画面左上)

れきはくインフォメーション

3月		2月	
土	27	土	13
第174回千障講座 ○新収蔵品展において、注目すべき作品の鑑賞ポイント・資料的価値・魅力あれこれについてお話しします。 13時30分～15時 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)		第171回千障講座 ○大津市埋蔵文化財調査センターを見学し、発掘された出土品のその後のゆくえを見学します。 10時～11時30分 講師 市文化財保護課技師	
日	14	土	20
第173回千障講座 ○新収蔵品展に関連した画人をとりあげ、その興味深い画業に焦点をあてます。 13時30分～15時 講師 黒川修一(京都造形芸術大学助教授)		第172回千障講座 ○近世初期より、何度も計画された塩津と敦賀を結ぶ琵琶湖運河計画の実態を検討します。 13時30分～15時 講師 杉江進(本館学芸員)	
土	13	土	13
第170回千障講座 ○湖族の郷資料館の見学や、聖田の古い町並みを歩きながら、聖田の歴史を探ります。 10時～11時30分 講師 樋爪修(本館学芸員)		第170回千障講座 ○近世琵琶湖の運河計画と新田開発	
第169回千障講座 ○新収蔵品展に登場した画人をとりあげ、その興味深い画業に焦点をあてます。 13時30分～15時 講師 黒川修一(京都造形芸術大学助教授)		第169回千障講座 ○大津市埋蔵文化財調査センターを見学し、発掘された出土品のその後のゆくえを見学します。 10時～11時30分 講師 市文化財保護課技師	

新収蔵品展 3月14日～28日

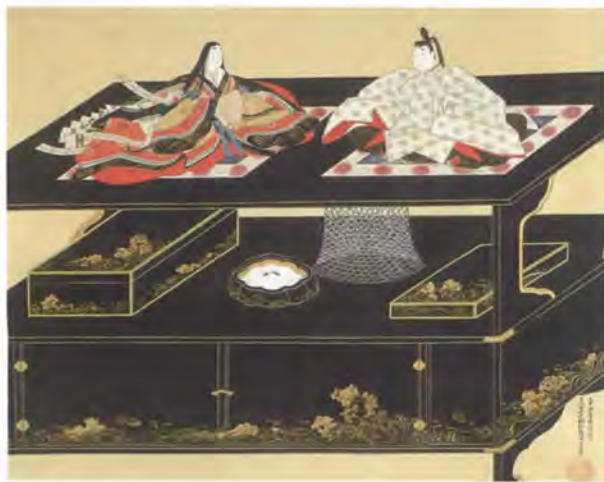
※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。
 ※いずれの講座もはがきで、お申込みください。定員を越える場合は抽選の上、落選者のみ通知します。連絡のない場合は当日受付までお越しください。

収蔵品紹介 33

難図 狩野永岳筆 一幅 個人蔵(新収蔵品展出陳作品)
 嘉永二年(一八四九) 六五・七×八一・九

永岳(一七九〇～一八六七)は、桃山時代の巨匠、狩野山楽以来の画系を伝える京狩野家九代目。狩野派系絵師の衰退が色濃く江戸後期以降の京都画壇にあって、その抜きん出た実力とともに、意欲的に他流派と交流して確固たる地位を築きました。安政御所御造営では、格式の高い場所の障壁画を数多く担当した他、九条家及び彦根藩の御用絵師を勤め、近江にもゆかりの深い画人です。本作品は、山水や中国人物を描くことが多い永岳にあっては珍しい作例といえます。もっとも、難人形の描写は、殆ど人物画と見まがうばかりの細密なものです。同時期の絵師が類型的に描いた可愛らしい紙難(町人向け)と比べると非常に異質なもので、本作品はおそらく大名家の婚礼調度として描かれたため別次元の難図となったのでしょう。例えば、難を飾っている黒棚、そこに置かれた硯箱や炭団箱は、いずれも黒塗りの蒔絵で統一され、いかにも厳かな婚礼調度の類です。蒔絵の文様は、さざれ石に波濤・貝散らしとなつているとともに、当初のものともみられる表具裂(布)には、「寿」の文様(地紋)が織り込まれています。二つの文様を合わせると、末永い幸せの意味となります。お難さまは、新郎新婦と重ね合わせて描かれたでしょう。なお、掛け軸の軸首には、やはり蒔絵で徳川の三葉葵の御紋が裝飾されています。以上の点と、難図であることを踏まえて単純に推測すると、徳川家もしくは松平家の子女の婚礼道具として、永岳が描いたことが想像されます。ただし、彦根藩への輿入れかどうかは判然としません。いずれにせよ、永岳入魂の仕事であったのは確かで、描写以外の入念ぶりも際立っています。黒棚等は、黒漆の質感を表すために、目一杯に膠入りの濃墨を用いて厚塗りされる他、難の装束や、その敷物は、微妙な顔料の混ぜ合わせをして賦彩されており、贅を尽した工夫が見られます。還暦を迎えても、なお彼の画技が充実していることをこの作品は物語っています。

(横谷 賢一郎)



大津歴博だより No.36
 平成11年1月15日

大津市歴史博物館
 〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077) 521-2100